

令和3年度 学生による地域フィールドワーク研究助成事業
研 究 成 果 報 告 書

- ・機関及び学部、学科等名 富山大学芸術文化学部・芸術文化学科
- ・所属ゼミ 藪谷研究室
- ・指導教員 藪谷祐介
- ・代表学生 亀山文音
- ・参加学生 北島陽貴、北野まつ葉、谷内遥香、有原千尋、川越梨央、高橋ゆう

【研究題目】 まちの美術館—新たな町家活用モデルの提案と展覧会の実践—

1. 課題解決策の要約

高岡市吉久(以下、吉久)は2020年に国の重要伝統的建造物群保存地区(以下、重伝建)に選定された一方で、空き家の増加とその活用という課題に直面している。

吉久で屋内外での絵画や彫刻、クラフト小物などの展示を行う「さまのこアート in よっさ」が20年以上開催されていることに着目し、空き家・町家活用の課題解決策として、町家を美術館・ギャラリーとして活用するモデルの提案を行おうと考えた。

2. 調査研究の目的

2020年に重伝建に選定された吉久の地域資源の一つである町家を美術館に見立て、家やまちの「記憶」をテーマに現代アート(インスタレーション)の展覧会を開催する。それにより吉久や町家の魅力発信の方法としての有効性を検証し、新たな町家活用モデルとして提案することを本研究の目的とする。

3. 調査研究の内容

吉久に所在する、現所有者によって空き家になってすぐに購入されたが、現在は住居としては使われていない町家「農庵」を会場とし、富山大学芸術文化学部講師である長田堅二郎氏、平田昌輝氏の作家2名による現代アート(インスタレーション)の展覧会を実践する。展覧会の概要は以下の表1に示す。

表1 展覧会概要

タイトル	記憶する家
会期	2021年10月16日(土)～22日(金)
会場	富山県高岡市吉久 農庵
開場時間	10:00～17:00
入場	無料/事前予約制
作家	長田堅二郎、平田昌輝

尚、効果検証は、展覧会の会期中に実施する来場者を対象としたアンケート調査と、町家の所有者へのヒアリング調査から行う。

4. 調査研究の成果

1. 展覧会

展覧会「記憶する家」は、2021 年 10 月 16 日（土）から 22 日（金）にかけて開催した。

会場には長田堅二郎氏、平田昌輝氏の作家 2 名によって吉久の歴史や、家に残る記憶などを元に制作された作品が展示され、町家とインスタレーション作品が融合し、非日常的で別世界のような空間となっていた。



来場者の鑑賞風景

また、町家に残されていた農具や家具、道具を用いて展覧会の看板や、立ち入り禁止のサイン、アンケートのペンスタンドとして活用したり、展示したりした（下記画像参照）。



町家という空間だけでなく、そこにある残されていた物の新たな活用方法についても提案し、「こういう使い方があったんだ」という感想もあった。

作品にも家に残されていた廃材や茶碗が用いられている（下記画像参照）。



2. アンケート・ヒアリング調査結果

10月16日(土)と17日(日)に吉久で開催の「さまのこアート in よっさ 2021」プログラムの一環として同時開催したことも影響し、総来場者数 200 名以上という成果を残すことができた。尚、正確な来場者数を測ることができなかったため、総来場者数は来場者アンケートの回収数から推定している(表 2、図 1)。

表 2 日別回収数

日付	回収数
10月16日	42
10月17日	37
10月18日	25
10月19日	15
10月20日	17
10月21日	19
10月22日	35
計	190

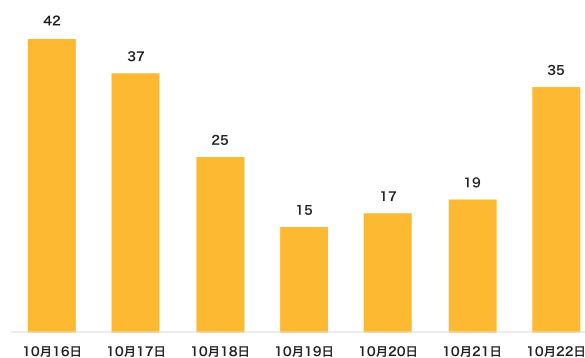


図 1 日別回収数

また、アンケート結果の来場者の年代を参照すると、最も多かったのは 20 代だが、10 代未満から 80 代以上までどの年代にも来場者がいることから、年代を問わず幅広く来場があったことが分かる(表 3、図 2)。

幅広い年代に町家の新たな活用方法を実際に鑑賞、体験を通して周知できたことは、成果であると言える。

表 3 年代

年代	n	%
10代未満	4	2.1
10代	6	3.2
20代	62	32.6
30代	7	3.7
40代	15	7.9
50代	21	11.1
60代	30	15.8
70代	32	16.8
80代以上	13	6.8
計	190	100.0

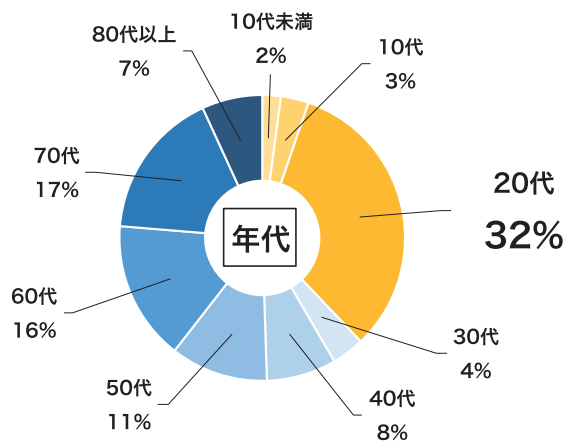


図 2 年代

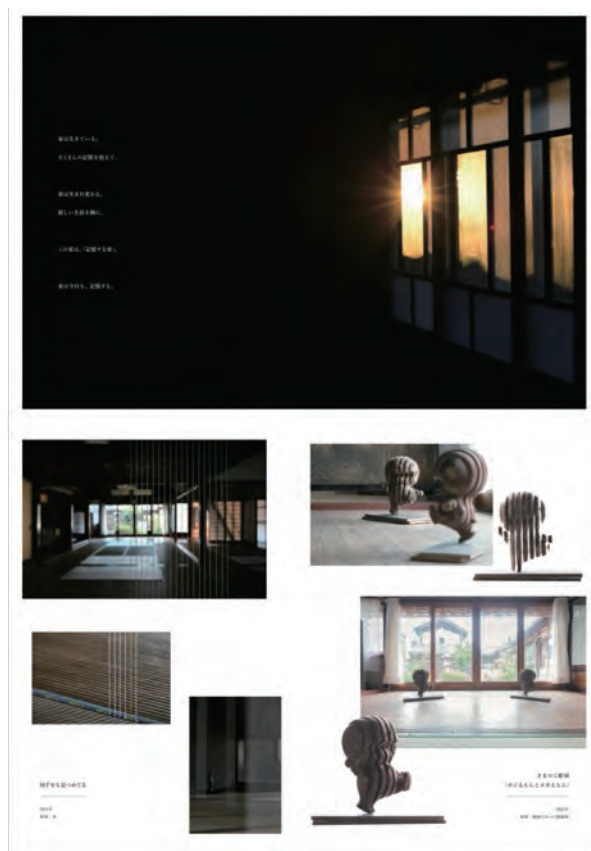
さらに、アンケートの記述回答には、町家の魅力や町家を活用していることを評価する意見が多く見られ、「吉久の町家の改修に興味がある。参考になった。」という意見もあり、今回の展覧会が今後の町家活用の参考になったことが明らかとなった。また、所有者へのヒアリングからは、「これがベストな使い方だと思うようになった」という意見を聞くことができ、新たな町家活用モデルの提案の成果があったと言える。

3. 成果物

- フライヤー、ポスター
デザイン:学部3年 高橋ゆう



- 記録集(30 ページ)※一部抜粋
デザイン:学部3年 高橋ゆう



※一部抜粋

- 映像制作:学部3年 川越梨央



※一部抜粋

5. 調査研究に基づく提言

町家や町の文脈を読み取って制作されたアート作品と、作品が設置された空間からは、町家という空間の魅力を改めて発見することができる。空き家や町家を、美術館やギャラリーのような展示空間として活用することは、魅力発信の場としても、空き家・町家活用の課題解決に有効なモデルであると言える。

6. 課題解決策の自己評価

町家を美術館に見立てた展覧会の実践は、実際に空間を体験し、活用のリアルなイメージを持つことができるため、新たな活用モデルの提案としてふさわしいものであったと考える。また、アンケート調査だけでは分からない、来場者の鑑賞時の動きや会話からも成果を得ることができ、実践研究のメリットを実感した。